IMAJ ニュース
No.36・37 合併号
国際MRA日本協会機関誌
発行年月日　昭和59年7月31日
発行所　国際MRA日本協会
発行者　柳沢錬造
TEL.03－821－3737㈹
頒価　1部　200円
INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN　〒113・東京都文京区千駄木4－13－4

対立から融和へ――今、世界の求めるもの

(1984MRA国際会議開催)

〈サブテーマ〉
①これからのアジア
――道義立国への道を探る
②産業の新しい課題
――国際的視野に立つ人格の形成
③思いやりとやすらぎを育む家庭、教育
④心の平和がもたらす世界平和

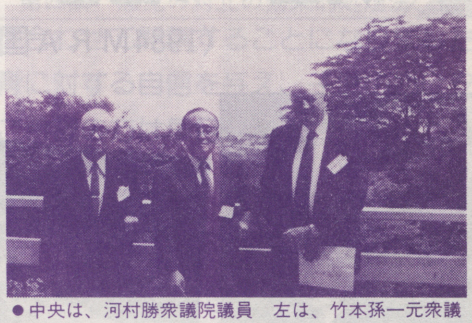
第8回目を迎えた本年度のMRA国際会議は、「対立から融和へ――今、世界の求めるもの」というメイン・テーマで開催され、世界13ヶ国から42名の海外代表が参加した。殊にアジア・太洋州からは、9ヶ国34名というこれまでにない多くの参加があり、小田原の〝アジアセンター〟で開かれるにふさわしい会議となった。

小田原会議（5/18～5/20）のあと、関西（5/22～5/26）、東京（5/28～6/2）、埼玉（6/3～6/4）、茨城（6/5～6/7）などで様々な会合が開かれ、中井小田原市長、坂井兵庫県知事、畑埼玉県知事（夫人）、竹内茨城県知事夫妻、和田水戸市長をはじめ、各地の地方公共団体や社会教育団体との交流が行われた。

本年はまた、家庭を開放してホームステイで外国人を迎える家が各地で増えたことが、心の交わりに大きく貢献した。〝融和〟をもたらす人の輪が、家庭から、学校から、職場から各地へと広がったようである。以下、地域別に3週間にわたる動きをふりかえってみたい。

小田原会議（5/18～5/20から）

●全体会議で話す、瀧山海外鉄道技術交流協会理事長



●中央は、河村勝衆議院議員　左は、竹本孫一元衆議院議員　右は、キム・ビーズリー氏（豪）

●「文化の夕べ」でバグ・パイプを演奏するジェフリー・クレイグさん

◆**二宮秀夫（二宮呉服店代表社員）**…ここ天神山にこのアジアセンターが建設される時に、関院の宮様は、「世の中にお役に立つような施設を」という思いを込めて、ご自身の住まいを快く売られました。ロビーの椅子は在豪軍人から、映写機はオランダから、というように、日本の財界人や労組の方々を含めた世界各国の好意によって建てられたのです。二十二年前の当時は大変な騒ぎとなり、青年会議所の副理事長をしていた私もびっくりしました。商売の成功と資本の蓄積のみがすべての価値判断の基準だった私ですが、「〝新しい世界造り〟という大きな仕事のために、私のような一介の小売り商人でも、決意をすれば役割はあるんだ。」と教わったのです。脱税していた分を十年ぶりにおさめた時感じた「心の平安」は、良心がとがめているうちは何事にも一〇〇％力を出しきれないことを教えてくれました。また妹の方を溺愛していたと長く恨んでいた父に謝罪したことは、家庭に平和を、労使間に融合をもたらし、ひいては事業の拡大へとつながりました。しかし、自分のところだけ救われてもダメです。恩返しのつもりで、生涯MRAの活動をしようと努力してきました。「本当に利己主義を克服するためには、自分の心に世界を全部入れなさい。」というチャレンジを受け、暮れの忙しい時にインドの会議に出かけたこともあります。夢中になって築いた日本の産業や経済も、健全な思想の基盤がなければ、とんでもない方向にいってしまうかもしれません。しかし、MRAの原理の利用は、家庭、街づくり、産業、国家間の融合に必ず役に立つでしょう。要は一人一人が決心して、原体験を持っていくことです。

◆**キム・ビーズリー（豪・元教育大臣）**…戦時中ニューギニアで宣教師をしていた兄は、日本軍の捕虜となり、船で日本へ運ばれる途中に米国の魚雷の砲撃を受けて死んだ。戦後MRAに出会って日本との関係を考えた時、貿易なしでは生きていけない日本に対して、生きる道をとざすような経済政策をとった戦前のオーストラリアもまた間違っていたのだと気づき、議会でそう演説をした。MRAの世界会議場スイスのコーで、「自己を正当化せず、自分の利益を考えず」に心の声に耳を傾けることを学んだ時、「オーストラリアの現住民アボリジニーへの差別は徹廃されるべきだ。」という考えが浮かんだ。後にこれは国の政策として受け入れられ、現在アボリジニーは、日本の二倍にあたる土地を所有するようにまでなった。「自分でやれる限り正せ、あとは神がやってくれる。」このブックマンの言葉をかみしめたい。

◆**竹本孫一（元衆議院議員）**…従来の日本の政治は「量」と「速さ」という二つのQ（Quantity, Quickness）を重視してきましたが、これからは発想を転換して、「質」と「静けさ」の二つのQ（Quality, Quietness）が求められる時代になるでしょう。それだけに、MRAが教える「静かな時間をもって、神の声、良心の声に耳を傾ける」ことに、大きな意味を見い出します。

◆**鄭濬（MRA韓国本部理事長・元国会議員）**…東洋と西洋、また老若にかかわらずみな長生きしたいものです。「対立」は、精神的負担を大きくし、短命を招きがちですが、「融和」は長生きできる可能性を与えてくれます。二十代で肺結核で死にかけた私でしたが、七〇歳の今日までこれたのは、「心の平和」、「純潔」、「正しいことを考える」という健康法をMRAが教えてくれたからです。MRA運動は長生きの秘訣です。長生きしたかったら、徹底的になさることをお勧めします。

◆**ジョン・モーア（米国・スコビル・マニュファクチャリング社副社長）**…新聞の見出しをよいものに変えていくよう、陰で働くのがMRAの役割だ。一九五九年にMRAの国際会議に夫婦で出席して感銘を受けたが、「理想ばかりかかげてビジネスにはむかない人間」と見られるのが嫌で、会社への報告が遅れた。意を決して、「愛」と「共通の目的」を持った世界中の人達が集まって

いたこと、また心の声に聞いた時に世界で起こった奇跡についても話したら、上役は興味をもって聞いてくれた。以来、会社は労使双方からMRAの会議へ代表を送るようになり、生産性はあがり、ストライキとも無縁である。

◆ソーラ・ローラ（豪・主婦）…孫のためにも、新しい世界を築いていきたいと思います。一度、生活費のたしにするために夫のポケットから二〇〇ドル失敬して、それを謝まったことがありました。自分が正直でなかったら、どうやって孫や子供達に「正直であれ。」と言えるでしょう？

◆林科熙（中華民国●社員）…オーストラリアにいる時、東洋に対して優越感を持っているらしい人をひどく嫌っていた。しかし、卓球をしている時に、『愛』と『おもいやり』は、ちょうどピンポン玉のように、受けたければ、まず自分から打たなければいけない。」そう気がついて、自分の態度や偏見を謝罪したら、心が自由になり、その人との仲直りもできた。平和を築くためには、まず人の心の中に平安を見いだすことが必要だと思う。

今回のMRA国際会議に参加された、カンボジア代表六名の来日に際しましては、世界宗教者平和会議日本委員会と、庭野平和財団よりご援助をいただいたことをここにご報告し、この紙面を借りて深く感謝申し上げます。

●分科会（後列中央の男性３人が、カンボジア代表）

分・科・会・報・告

テーマ

『これからのアジア――道義立国への道を探る』

中嶋良樹
（新生緑建設株式会社勤務）

参加者は、韓国、中華民国、マレーシア、カンボジア、インド、日本の六ヶ国からの三十二名でした。カンボジアからの参加者六名は、民主カンボジア連合政府のソン・サン首相が、新たな国造りのために派遣された、宗教・教育・道徳関係の各村の指導者です。

その一人、ゲット・ソポン氏（アンピル村、赤十字委員長）は、共産主義政権のもとで、家族と親類の合計二十九人が殺されたことを語られ、また、現在の難民キャンプの状況については次のように説明されました。「水や食糧は、毎週国連の配給があるが充分ではない。井戸を掘って使用していたが、ベトナム軍の侵略で立ち退かざるを得なくなり、以来水不足は続いている。食糧の配給は、女性、子供が優先するので、男性は充分な食物を得られない。ジャングルの中はマラリヤの危険があるが、薬不足で問題は深刻化している。」

相馬雪香さん（インドシナ難民を助ける会会長）は、「自由を満喫している日本でも、その一人一人が隣国に、また世界に対して心を開く時が来ています。心を四つの絶対標準（絶対正直・純潔・無私・愛）に照らし、あわせ、自分より優れたものの力を借りて、自らを変えていくことから始めましょう。」と話されました。

韓国の金洛升氏は、「韓国にも悲惨な歴史があり、カンボジアの皆さんの苦しみはよくわかります。どうか希望をもってがんばって下さい。」と拍手で激励しました。韓国代表九人のうち、四人は教育界の方々で、帰国後は生徒に、この大会で知らされた事実を伝えたいと述べられました。

インドのティア・ナヤ夫人は、「若いインターパンヤ・ビクーさんが、仏教の修行僧をしておられることに感銘を受けた。戦争によって失われかけた仏教を再興し、また、私達が物質主義によって失いかけたものを求めていらっしゃる。私達にできることは小さいかもしれないが、皆さんの平和のために祈りたい。」と話されました。

カンボジアのギイム・ピラック氏（ノンサメット村、仏教協会会長）は、「私達に必要なのは、仏の恵みだと思う。」、ニェム・チューレン氏（ソクサン村、人道援助担当者）は、「近い将来、カンボジアが自由と平和を得ることを信じている。帰国してMRAの持つ意味を伝えたい。」と、それぞれ発言されました。

私は今回の分科会を通じて、日本と他のアジアの国々との間に、お互いに学びあえる、助けあえる多くのものがあることを知りました。日本は比較的うまくいっている、といった小さな自己満足に陥ることなく、今しなければならないことを求め、実行していく時がきていると感じます。

国際ダイアローグ

日本と海外とのきめ細かな対話（ダイアローグ）をめざす国際ダイアローグは、小田原会議の最終日の五月二十日に開催された。かみあったダイアローグを実際にこの目で見ようとかけつけた大学のゼミのグループ十五人を含め、会場には若い参加者も目立った。

一、これからは〝宗教の時代〟といわれるが？

二、核戦争を回避するために

三、近代文明の難局を打開するために

という三つのサブテーマには、限られた時間の中でスケールの大きなパネルスピーカー六名の論点に方向付けを与えると同時に、洞察や叡知だけではなく、思考のしかたや体験を含めたスピーカー六名の人間性をも、惜しみなく表出してもらうという狙いもあった。

企画の段階からこのダイアローグの推進役であった**木内信胤氏（世界経済調査会理事長）**は、宗教の時代の当来を予測した上で、世界中の人々の心が、世の中には論証できないことがたくさんあることを認め、物質的な利益・繁栄・現世的な希望を越えたところに人生の価値・生きがいを求める――いわば〝宗教的な態度〟に変わることが「宗教的な時代」であると規定した。そして〝生存の競争〟を原動力とした近代科学技術文明の行き過ぎにブレーキをかけるには、自分の側でがまんできることはがまんし、一方相手に自分の無理を押しつけないといった〝宗教的な態度〟の実践（例えば自動車の自主規制）が必要であると述べた。双方がこうした態度をとることによって、今までとは全く違った考え方が米・ソ間にも生まれる可能性があり、世界の対立もこうしたことから、徐々にであっても逐次融和に向かっていく、としめくくった。

木内氏とは既に手紙を通して頻繁なダイアローグを繰り返してきた、**ジョン・バンダウォーター氏（米・元労働関係委員長）**は、アメリカがこれまで他国とのダイアローグを充分に行わず、しばしば押しつけばかりをしてきた点を認めた上で、国家間の、報道陣を意識した公式チャンネルではない、インフォーマルな、忌憚（きたん）のない意見交換のできる民間のダイアローグの重要性を訴えた。

キム・ビーズリー氏（豪・元教育大臣）は、核兵器を持たないオーストラリアがソ連の核の攻撃目標になっている、と駐豪ソ連大使に脅かされただけで、何ともいえぬ〝恐れ〟が国民の間に植えつけられたくらいであるから、百二十年の間に六度も西ヨーロッパから侵略を受けたソ連国民の思考は、〝恐れ〟を度外視しては考えられないことを強調した。

日本在住のイクバル・アリ**モハメッド氏（パキスタン・国連難民高等弁務官事務所代表）**は、人の存在は終極的には超自然的な存在に依るものであることを、今こそ全ての宗教は確認する必要があり、実際神の力の再認識が世界中で起こっていると述べたうえで、MRAのいう文化や宗教の違いを越えた融和への動きにこそこうした神の力を全人類のために効果的に活かす上で大きな役割があると語った。そして「道徳的再建のための国連の十年」といったものを設定し、あらゆる対立が、変わらざる道義的基準のもとで解決されることを、世界中に訴えかけることを提案した。

中島正樹氏（三菱総合研究所社長）は、一九七八年スイスのMRA世界大会で初めて世界に発表した、グローバル・インフラストラクチャー・ファンド（世界公共投資基金）が、人々に真のグローバルな生き方や考え方を啓蒙すると同時に、特に争いが続く地域の人々に平和とはこういうものだということを示すために提案されたと述べた。そして軍事費削減による開発途上国援助の増加や、オリンピックの常時アテネ開催など、平和に関するいくつかの提案を示した。

山本七平氏は日程の都合でダイアローグには加わらず、その前日講演をされたが、以下がその要旨である。

松尾芭蕉が『全てのものが刻々と変化する中で、一方において全く変化しないものがある。これをつかむことが詩の心といえるが、この不変のものを不易という』と述べているが、渋沢栄一も『不易と流行――これからは宗教的時代』という漢詩を作り、生涯このテーマと取り組んでいる。

この不易こそが、近代的文明の難局を乗り切る最も重要なポイントになる。何故なら、変わらざるものを見ることによって、変化を見ることが重要だからである。明治時代は、近代化と同時に不易を残したから成功したのである。不易を残してこそ、流行を生かしつつ近代化を進めることができる。例えば日本には労働契約・終身雇用契約などないが、武家法以来の価値が不易として流れている。

不易を失うと、一国は国として機能しない。従って、国際関係においては、各国の不易をお互いに尊重し合い犯さないことが融和の条件であり、そこから核戦争の回避も可能となる。

箱根

スイス、コーのＭＲＡ世界大会に参加した東芝の労使代表は、これまで60人近くにのぼる。この〝コーのＯＢ会〟と海外代表との交歓が箱根の芝翠荘で行なわれたが、その中で佐藤実氏は次のように語った。

〝四つの基準を大切に――〟

東芝労働組合委員長　佐藤　実

私は今から七年前の昭和五十二年に、スイスのコーで開催されましたＭＲＡ産業人会議に、東芝労使の第一回代表として、参加させていただきました。それからは毎年、東芝労使で参加を続け、第七回を数えることになりました。

そして又、毎年、箱根強羅の保養所で、ＭＲＡを通して来日された諸外国の人々と、東芝労使で交流をする慣行もできた次第であります。この交流も、はじめは歓迎する私達の人数も少なかったのですが、回数を重ねるに従い多くなり、大変にぎやかに有意義に行われるようになりました。そして、ＭＲＡと自分について、想い出す機会をえて、自己の充実に考えを巡らしているのが実情と思っています。

ＭＲＡに四つの基準があります。私は心から含蓄のある言葉と思います。むしろ、人生についての基本事項だと思っています。

日本文字で書かれた「絶対正直、絶対純潔、絶対無私、絶対愛」の書が、コーのマウンテンハウスの大広間の正面に飾られていたことが目に浮びます。

正直であることは、人間の信頼関係を築く上で大切な要素です。逆であるとすれば、信用もなく、相手にされないことになります。愛をもって人と接することであると考えています。私は、案外人の好き嫌いが激しく、よく直せと指摘されるところです。そこで、嫌いな人でも、愛をもって接する努力をすることにより、相手も対応してくれると思うのです。

純潔、無私のこの言葉も噛みしめると味があります。でも、完全無欠かと言われると明快にはまだ答えられない私であり、更に精進しないとならないと思っております。

労使関係のあり方についても、この四つの基準を基本とすることであると考えております。

「労使の信頼関係の維持をはかること」――分配については対立しても、お互いの信頼がなければ、問題の解決ができないばかりか、当事者能力がないことに通ずると思うのです。

「相手の立場を尊重すること」――愛につながることと思いますが、置かれている背景を考えるということは、相手も考えてくれるということであり、平和的な解決の糸口がみつかることになると思うのです。

「話合いを尊重すること」――互いの立場が違うと、主張が対立することはさけられませんが、平行線でも困るわけです。双方が互譲の気持をもって、最後まで話合うことが大切であると考えるわけです。

私自身、ＭＲＡの多くの人達と接することから、多くの教訓を得たことを感謝を申し上げ、感じていることを率直に述べさせていただいた次第であります。

●東芝保養所（芝翠荘）でくつろぐ海外代表

ビーズリー氏が推薦する、モノ以外に「日本が輸出できる9つの品目」

1. 抑圧された人々に尊厳を
2. 抑圧する人々に良心を
3. 混乱した人々に明確さを
4. 傷ついた人々に癒しを
5. 恨みっぽく、執念深い人に、こだわりからの自由を
6. 西側諸国に建設的な外交政策のアイデアを
7. 深い分裂に社会的融和を
8. 宗教間の角突き合いを越える慈悲の精神を
9. 汚職によってコンセンサスを失っている社会に誠実さと正直さを

関西プログラム報告

●昭和25年のスイス世界大会へ第一回日本代表として参加された時の思い出を語る弘世現日本生命会長

●関西プログラム

5月23日(水)　関経連、大阪青年会議所
24日(木)　ダイアローグ・イン・コウベ
25日(金)　日本の伝統文化視察(奈良)
26日(土)　大阪集会

大阪・関経連午餐会

◆阪本勇（関西経済連合会・国際交流委員長）…「宗教は個人には幸福をもたらすが、世界の問題の根底には、異宗教の対立があることも多い。私にも一つの宗教をおしつけるつもりではないか？」そんな恐れをもって、数年前初めてMRA会議に参加いたしました。しかし、皆さんが宗教の相違を越えて共通のものを追求する姿に魅かれました。深刻な、悲惨な状況がくりひろげられている世界ではありますが、本日また皆様が、「善意を通して、政治を、経済を、世界を動かすことは可能です。」と言われるのを聞いて、おおいに勇気づけられました。今後ともMRA運動を応援していくつもりです。

●ダイアローグ・イン・コーベでの中華民国代表

ダイアローグ・イン・コーベ

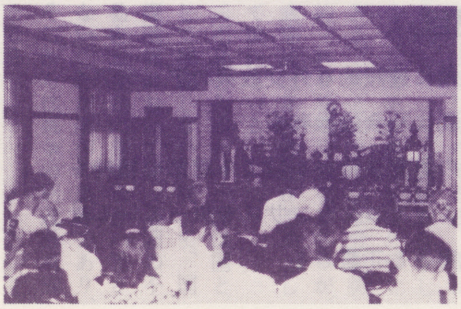
◆ハリダス・ナヤ（マレーシア・インドのMRAで長く活躍）……インドでは、人種や宗教の相違による緊張が生じています。「飢餓」と「汚職の横行」に対しても、一般の人々に何ができるかを、考える必要があります。月へ到達することすら可能にした科学技術の進歩にあわせて、人間の心もまた発達していかなければなりません。「くさった卵からいいオムレツはできない」と言いますが、MRAを知った人々が、どんな状況下においても勇気を持って立ちむかう方向で育ってくれたなら、きっとインドも変わるだろうという希望をもっています。

●中央が、佐藤健二さん

大阪集会

◆佐藤健治（株式会社マルナカ興産）……世界の人々は約40億、男女の比率は各々50％です。「でも、私達の国では80％が女性です。」小さな体に僧衣をまとったカンボジアのお坊さんインターパンヤ・ビクーさんからこの言葉を聞いた時、私はカンボジアで起ったことがどんなに悲惨であったのかが初めてわかり愕然としました。「カンボジアがそうなったのは汚職、分裂、嫉妬といった精神的な力の弱体化―国を支える精神的基盤である仏教の弱体化が原因です。」仏教徒であるビクーさんはとてもつらそうでした。

日本が第二のカンボジアにならないと誰が言い切れるでしょうか。私達は自己の欲望のためにだけ行動していたのではないでしょうか。夕食会での美味しい料理を味わいながら、故国の人々を想い正午以降は一切食物をとらないというビクーさんの心情を想い、自分がどんなに幸福であるのかを実感しました。毎日の生活の中で、私はいつもビクーさんのことを思い起こすようにしたいと思っています。



●壺阪寺で常盤勝憲氏の講話に耳を傾ける海外参加者達(奈良)

東京プログラム

最もきめ細かで多彩な企画が盛り込まれたのが、東京プログラムであった。全員で或いは小グループに分かれて、〝融和づくり〟を目指す各界の代表との〝ミニ・ダイアローグ〟が繰りひろげられた。

日産自動車石原社長や大熊顧問との懇談でワタナ博士（タイ）は「エコノミックアニマルというかっての日本のイメージが、難民救済活動を通して、苦しむ他人や他国を思いやる日本へと変化している」と述べた。経団連糖沢理財部長や、ケンブリッチ・リサーチ研究所今井所長によるブリーフィングは、日本経済や産業のしくみや実力を外国人の側で把握しやすい形で説き明かし、大好評であった。

全民労協や国労東京支部幹部との懇談は大変なごやかなもので、労働組合の社会に対する役割や相互理解の大切さについて有意義な意見交換が行われた。

新幹線司令室見学のあと行われた国鉄仁杉総裁との懇談で、総裁はMRAがかって国鉄の労働関係改善に果たした役割を評価した。

カンボジア代表は、世界宗教者平和会議・庭野平和財団・全日本仏教会・曹洞宗ボランティア会・インドシナ難民を助ける会と懇談し、〝仏教による国の再建〟に多くの支援を得た。

四党国会議員十二名との午餐会や、恒例の土光敏夫名誉会長主催による午餐会では、世界の対立を融和に導くための真摯なダイアローグが行われた。

●国鉄仁杉総裁（左から三人目）、榊たか子さん（その右）、福井隆夫さん（国鉄・右はし）と。

◆谷川和穂（元防衛庁長官）……地球がガタガタに分裂してしまうほど深刻な世界状況の中で、今こそ海を隔てた国々が理解し、手を結びあう必要があります。しかし、平和や自由を論じる前に、道義の高揚が論じられるべきです。スイスのコーで聞いた言葉に「脇で立って見ている者は裏切り者だ（By-stander is a betrayer）」というものがあります。地球が危機に直面しているのに、大事な人類の将来に対して何もしないでいる者は、裏切りをしているのと同様だ、という意味で、以来私の座右の銘となっております。

●午餐会であいさつする土光名誉会長（国際文化会館にて）

◆インターパンヤ・ビクー（カンボジア・プラサットセライ僧院副管長）……MRAでこのたび学んだものに四つの標準（絶対正直・純潔・無私・愛）があります。この中で私には、「純潔」と「愛」が、特に大切に思えるのです。心が清ければ悪を営むことはありませんし、世界中どこに行っても、体の主人は〝心〟です。心を清めることを学んだなら、世界の苦悩はなくなるでしょう。また、「世界のすべての人達に心を開け」と教えて下さったことにもお礼を言います。人と人が、国と国とが愛しあうことができたら、学びあうことも可能です。ですから、「純潔」と「愛」が宿れば、必ずや「正直」も「無私」も、もたらし得ると思います。この世界は多くの苦悩に満ちていますが、四つの標準の達成で、人々も解放することができるはずです。（以上、土光名誉会長主催の午餐会から）

MRA 浦和集会を終えて——

小宮綾子

小田原でお逢いしたなつかしい顔の揃った六月三日には、MRA浦和集会が開かれました。

何時もながら、あたたかい雰囲気の中で心を開き合うのがこの会であります。国の内外の諸問題、特に経済摩擦にはバンダウォーターさんが、マレーシヤやインドの国内問題にはハリダス・ナヤさんが、そして教育問題等、それぞれの立場からの御発言、体験を通して話されるので、よく理解ができます。

去年、コーで行なわれた世界大会に次男が参加させていただいて以来、我が家のMRAへの関心は強く、相馬先生をはじめ事務局の方々のお話を伺ったりしていると、アジアの国々が、そしてヨーロッパ迄が近くなったような気がしてまいります。「MRAのたしかな出発点は自分だ、四つの物差しをもって心の声に聞くことにはじまる」といいます。ほんとうに身近な簡単なことのようですけれど、深く考えますと、生やさしいことではありません。特に絶対無私とは大へんです。私は強情で執念深い性格ですから、相当長期戦になりそうだと覚悟しております。

小学校の低学年の頃、よくゴミ拾いをさせられた時、先生からいわれたことがあ

ります。「全校生徒の一人一人がゴミを落さないように心掛けたら、校庭は何時もきれいでしょうに、一人一人の心が大切ですね。」この言葉は、その頃の私に強い感銘を与えました。

世界中の人達が平和を願いながら、何時も不安と恐怖感を拭うことができないでいる現在、MRAが一番必要な時だと私は思います。ベトナムやカンボジア難民の苦しみは、決してこれらの国民が自ら招いたものではないでしょう。自分達の国益しか考えない大国のエゴイズムと、他人の、そして他国民の苦しみや悲しみをおしはかることのない連帯感の欠如の間で、これらの国の人々は呻吟しているのだと思います。「平和」という言葉も、左右両翼からみれば、天地の隔たりがある世の中です。先ず自己を変えることに努力し、他人への思いやりを第一とするMRAの目指す平和こそ、真の世界平和の基礎であると思います。

第一日目の話合いが終り、それぞれの宿泊家庭に別れる時でした。スリランカのロヒニさんが、英語のわからない私に話しかけて来ました。よく聞いていますと「トゥモロー」だけがわかりました。「あゝ明日も来るかといっているのだな。」と判断して、「イエス」と答えますと、笑って握手して帰って行きました。去って行く車を見送りながら思わず笑ってしまいましたが、何かほのぼのとあたたかいものを感じました。

二日目に大宮の盆栽、岩槻の人形製作等の見学も終えて、みんな思い思いの買物を楽しんで帰りましたが、バスの中でのなごやかな話合いや笑い、それぞれの国の人が、誰も何も疑うこともなく、信頼し合って笑い楽しんでいる、この姿が国でありたい、世界でありたいと誰もが願うことでしょう。あせって実のない集りとなっては困りますが、一人でも多くの人の参加を得るために、入会してまだ日の浅い私ですが、毎日毎日心の掃除をしながら、信頼と尊重で結ばれた心の平和な日々が来ますよう祈りつつ、努力していきたいと思って居ります。

水戸

ホームステイがもたらす
世界家族の融和

小貫　知恵子

●桐原さん一家とバンダウォーター夫妻(米国)、(中列の左から2番目が、小貫知恵子さん)

今回、小田原で行われた国際会議に初めて参加させていただき、多くのことを考えさせられ、また学びました。

四年間のアメリカ留学中は、多くの人種が混ざり合って一つの国家を形成しているアメリカでの人種間の対立に、大きなショックを受けたものです。歴史的背景・言語・宗教・文化・習慣の相違、また偏見・差別など多くの要素がからみあった問題だけに、容易な問題ではないと感じました。人間が一つの信念や観念を変えるということは、難しいことです。ましてや人種や宗教を越えて統一化されるなど、不可能なことだと思っていました。

しかし、今大会において宗教・文化・言語の異なる人々が集まり、そのお互いを理解しようとする姿、また世界の平和を考えている姿に心動かされました。MRAの四つの標準「絶対正直・純潔・無私・愛」は、人間が人種や宗教を超越して求めるべき教訓ではないかと思いました。

大会を終えて二週間後、約二十名の海外の方々が水戸にいらっしゃいました。来年開催される筑波科学万博の会場見学や、新聞社訪問、竹内知事や和田市長への表敬訪問、知事夫人との昼食会、青年会議所との夕食会と、多忙なスケジュールをこなされました。海外の方々はホームステイをなさいましたから、各家庭でくつろがれたことは、日本でのよい思い出となったことでしょう。

私はアメリカのバンダウォーター御夫妻とともに、桐原さん御一家へと同行させていただきました。桐原さんは戦争でお父様を亡くされたとのことですが、バンダウォーターさんはやはり、大戦中は、日本軍の手に戦っていた方です。「戦争で多くの方々が心に傷を負ったのは、大変悲しいことです。将来私達は、二度と戦争を起こさないようにしなければならないですね。」と言われたバンダウォーターさんに、桐原さんも「全くその通りです。」と大きくうなずかれました。四十年前の悲惨な戦争において対立しあっていた二つの国の人間が、今は一つのテーブルで語り合い、心と心のつながりを求め合う姿に、まさに今回のMRA会議のテーマである『対立から融和へ』の実例を見たように思いました。

バンダウォーター夫人は、桐原さん御一家と別れる際に、「私は、子供達が学校へ行く姿を見て、この子達のためにも決して戦争が起こりませんように、とお祈りしました。」という言葉を残していかれました。この言葉は、バンダウォーター御夫妻と桐原さん御一家が涙で別れを惜しむ姿とともに、深く印象に残っております。

今回のMRAを通して多くの方々と出会う機会を得、またこうした体験をさせていただけたことに感謝の意を表すとともに、学んだMRAの絶対標準を心の糧として、人と接してゆこうと思います。

社団法人認可 八月上旬に！

——設立総会開催さる——

去る六月二十一日、東京の憲政記念館にて、国際MRA日本協会臨時総会、並びに社団法人国際MRA日本協会の設立総会が開催された。

国際MRA日本協会臨時総会では、柳沢錬造氏を議長に選んだあと、先づ昭和五十八年度事業報告、会計報告、監査報告がなされ、それぞれ承認された。続いて社団法人国際MRA日本協会設立に伴い本会を解散し、財産（権利義務）および事業一切を同会へ無償譲渡し、引継がせることが提案され承認された。

引き続いて社団法人国際MRA日本協会設立総会が開催され、柳沢錬造氏を議長に選出したあと、設立趣意書の趣旨のもとに社団法人を設立することが諮（はか）れて可決され、直ちにそのための具体的な活動に入ることを決議した。続いて定款（ていかん）、資産の構成、設立後二年間の事業計画及び収支予算、役員予定者、についてそれぞれ原案通り可決した。最後に法人設立代表者に高瀬正二氏を、また議事録署名人に藤田幸久氏と長野清志氏を、それぞれ選任し議事を終了した。

これを以て、設立総会議事録を含む十二種類の必要関係書類を添付した、社団法人国際MRA日本協会設立許可申請書が、七月二十五日付で森喜朗文部大臣に提出された。現在文部省で最終的な審査が続いており、八月上旬には認可が降りる見込みである。

尚、文部省の指導による定款に基いて役員枠や役員名に変更があり、下記のような役員予定者が承認された。同じく新年度よりの会費は以下のように変更になる。（いずれも年額）

正会員（個人）　三、〇〇〇円
（法人）五〇、〇〇〇円
替助会員
（個人）　一、〇〇〇円以上
（法人）五〇、〇〇〇円以上

社団法人の設立に、これまで温いご理解とご協力を寄せていただいた会員の皆様に、この紙面をお借りして深く感謝申しあげます。

社団法人国際MRA 日本協会役員予定者

名誉会長	土光敏夫
会長	高瀬正二
副会長	住友義輝　相馬雪香
	柳沢錬造
専務理事	藤田幸久
理事	大塩榮　兼松正
	兼松恵　狩野安
	榊多嘉子　住友美子
	瀧真次郎　徳光憲
	中嶋勝治　中畑婦幹
	長野清志　二宮秀夫
	本郷富士子　山崎房一
監事	尾関雅則　鶴田重蔵
顧問	赤城海助　加藤シヅエ
	河原亮三郎　木内信胤
	木村行蔵　阪本勇
	杉田一次　鈴木強
	田嶋克己　瀧山養
	竹本孫一　塚本三郎
	永倉三郎　原文兵衛
	山田稔
参与	イエンツ・ウイルヘルムセン
	佐藤魁　畑千鶴子
	本郷健爾　増田敬作
	三井英子　矢野弘典
	山形毅章　和田宗一
	ジェフリー・クレイグ

国際MRA日本協会第9期会計報告

自：58年4月1日
至：59年3月31日

収入の部

科目	決算額	摘要
寄付金収入	3,892,475	
会費収入	15,718,000	
事業収入	6,032,762	①MRA国際会議 5,846,882 ②図書売上 99,380 ③講演会他 86,500
雑収入	376,933	預金利子等
前年度繰越金	2,717,449	
計	28,737,619	

支出の部

科目	決算額	摘要
管理費	14,459,623	
給料手当	5,303,900	事務局員5名
福利厚生費	321,180	
旅費交通費	419,490	役職員交通費、旅費
通信運搬費	1,989,993	
什器備品費	221,000	
消耗品費	380,700	
印刷製本費	331,900	
光熱水料費	785,767	
賃借料	3,420,000	MRAセンター、事務所、駐車場
事務所費	120,000	
雑費	1,165,693	
事業費	13,450,040	
①MRA国際会議	6,628,105	
②講演会費	53,255	
③国際交流費	5,457,760	渡航費、滞在費、招聘費、交流費
④出版費	1,310,920	
次期繰越	827,956	
計	28,737,619	

◆MRAの皆様に感謝します◆

神戸輸入促進フォーラム 理事長　田嶋克巳

去る五月二十四日のMRAダイアローグ・イン・コウベにて、イエンツ・ウィルヘルムセン氏が私どもの神戸輸入促進フォーラムの活動を称えて下さいましたので、今日迄自己宣伝と思われたくない余り話さなかった事実を、率直に書かせて頂くことにしました。

私は戦争、事業、病気という人間としての生死の極限の苦しみ、悲しみ、歓びの上昇転落を繰り返した人生を回顧し、佛道の修行を始めたことから心の目を開かせて頂いてきました。そうしたことから「輸入拡大促進」の運動を始めたのは、昭和五〇年のことでありました。

当時、第一次石油ショック後の不況を乗り越えんとして、大小の企業・商社は輸出に狂奔していました。私の提唱に誰一人として耳を傾けて呉れる人は無く、先ず自らの実践を決意し、反対する従業員に明治創業以来の輸出業の商権の総てを譲り渡し、総ての責任は私一人で背負う態勢で、創業以来の本社の土地に輸入拡大促進運動の第一歩の拠点ビルの建設を計画しました。

しかし輸入促進の声もない時だけに、当然のことですが取引銀行を初め誰一人の賛同者もありません。「不動産を他の方法で利用し、優雅・安楽に生きられる立場にありながら、何を好んで失敗することが明らかな危険と苦難の道に向かうのか」と、私のことを案じて下さる周囲からの忠告も頑固に無視し、それはやがて誹謗・嘲笑の渦と変わり、企画が進展せず、孤独、苦悶、屈辱に耐えての一年半となりました。

戦後は経済的地盤か沈下し、約一、〇〇〇社有るとは言え、殆どが小規模の輸出業者の神戸貿易業界でした。そこで私は、新しい国際化時代の転換期に神戸に輸入の流通問屋市場を作ることを目指したのです。

●前列正面の机に肩をならべる坂井知事(左)、後藤清一(三洋電機相談役)、田嶋の各氏(ダイアローグ・イン・コーベにて)

輸入への活路を拓くことこそ、業界の繁栄復活の機会である。世界の国々の人々のためでもあり、また日本の為にもこれは、『誰かが今やらねばならないことだ』と微力を顧みずに、佛意によって偶々私がその立場になったのだと心に決めておりました。最後の手段として、会社の土地を建設業者に譲渡抵当とし、「着手金や中間払いは無しで、竣工日の一括全額払い。若し一部でも未払となれば、誰にも迷惑はかけないが全くの裸になって神戸を去る覚悟」という条件にて、入札数社の中から某大手建設業者と契約しました。昭和五十一年六月二十八日の貿易記念日に、県・市・商工会議所・貿易諸団体約一〇〇名の来席を願い、「建設期間中に必ず欧米から貿易不均衡、市場解放の要請が起こり、輸入拡大促進が政府の緊急課題となる時が来る」ことを確信し、運命をかけて佛式の起工式を断行したのでした。

日本経済は、戦後の焼土から唯、豊かになることだけを求めて、他国の人々の苦悩や痛みを顧みることなく、経済主体・輸出至上で成長して来ました。しかし、物質至上の価値観から他に同悲することのない利己主義的になりつつある市民・国民の一人一人も、此処で世界の人々の平和と幸福を願い、少しでも行動する意識改革に目覚めるべき時であり、世界の理想たるべき理想を日本の理想とすべきである――その理想を「世界の夢は神戸から」の旗印として掲げ、そのための「輸入拡大促進、市場開放運動」の最初の足がかりとしての神戸輸入品卸売センター（田嶋ビル）の捨て身の建設でありました。

名誉、地位、利益も捨てて求めず、何の報いも求めないで、総てに報謝のまことを尽くし、理想に殉ずる覚悟、それは如来の真理に我が身を捧げる祈りの毎日でありました。

しかし、竣工近き頃の昭和五十二年九月には、「欧米からの貿易摩擦の激化」、「黒字国の責任追究」、「発展途上国からの輸入の要請」、「急激な円高」、そして「政府の緊急輸入促進対策」と、全ての環境がクライマックスとなったのです。四十数社の輸入業者で満室入居となり、各国領事を初め内外人の八五〇名に及ぶ来賓の竣工レセプションとなり、神戸出身の砂田重民代議士が福田総理の祝詞「今日の輸入促進の[illegible]必要時に、その運動の拠点ビルを二年も前から計画遂行されたことに敬意を表する」を代読頂き、テレビ・新聞にしばしば報道される奇蹟的な成果となったのでありました。

時の趨勢と共に、この時から多くの方々の共鳴を頂き、神戸の各大学教授・輸入業・卸売・小売・そして輸出企業・貿易関連業界・消費者団体・文化人・外国人、一般市民、更にその後神戸に歴史的に存在するユダヤ・キリスト・イスラム・ヒンズー・佛教・神道の教会・寺社の世界・日本の各聖職者も加わった個人・会社・団体を含めた、三百五十会員の市民運動団体「神戸輸入促進フォーラム」が発足いたしました。また土光敏夫様、水上達三様、知事、市長、会議所会頭には顧問となって頂きました。

以来七年間、関税・非関税の障壁の市場開放を初め、「輸入拡大促進」と相互の宗教者も加わった「国際文化交流」を相乗効果にして、世界の国々との相互理解に努力しております。また平和な新しい世界文明の創造に挑戦する神戸として、国内の産業社会と心の体質改善による「世界に貢献し世界から敬愛される国造りの市民運動」を、「国際化

推進」と共に、市民に呼びかけ続けて参りました。

私どもの初代会長になって頂いた故三木瀧蔵氏は、昭和五十六年四月十日自民党の公聴会に病をおして死を覚悟して上京されました。日本の将来を思い、過剰保護行政の行政改革の緒口とするべく、生糸の輸入制限行政是正の提言を行ない、その場で倒れ死去され、私どもの理想を死をもって実践されたのです。

世界、日本の人々の将来の幸福を願う、この様な聖なる心・真実の心の実践努力は、心が心を呼び、その輪が広がり、在神の各国の外国人を含めた数千名の市民が参加する国際交流の大会も毎年催しております。また、上記の主旨の宣言文を発表して市民運動を呼びかけるなど、種々の行事を行なわせて頂いて居ることに感謝しつつも、自己中心の厳しい競争と欲望と悦楽の社会の大騒音の中で、波長が合わないと言われ、また自分達とは関係はないと排斥され反発され、抹消されかねないこともしばしばでした。

過去九年の間に、余りにも多くの目に見えないもの、見えるものの抵抗が有りましたが、ただ佛道精進によってまこと一筋の心で貫き、心ある多くの方々のご協力を得まして、神・佛のお力で乗り越えさせて頂いて来て居ります。

然し、神戸輸入促進フォーラムの組織は、大きく見えても実際は心だけの連帯であるだけに、中枢の方々が妄想・自我にとらわれて心が曇れば、忽ち霧散し兼ねないものです。それゆえ、全ての自我執着を離れ、常に身を律し、忍耐強い和合と下座行に徹し、生涯の修行を頂いた歓びと感謝の死生観の祈りの毎日であります。

かかる思いの時に、私どもはMRAの方々の御一行を神戸に迎え、神戸集会を二度も行わせて頂きましたことに、深い感謝を致して居ります。

「人間性は変わることが出来る、国家経済も変わることが出来る、それが解答の成果である。世界の歴史を変えることが出来る、それがこの世代の使命である」と言うMRAの創始者フランク・ブックマン博士の言葉に深い感銘を受け、その心を心として実践奉仕されて来られたMRAの方々に、心から敬意と感謝のまことを捧げます。

真実を祈り行ずるものでありましょう。かかる世界、日本の全ての宗教に共通する「絶対の正直・純潔・無私・愛」のMRA精神によって、私どもは更に大きな勇気を与えられました。私どもは神戸地域社会から、新しい日本を造らんとする〝世界の夢は神戸から〟の旗印を掲げる運動ですが、今後は全く心を同じくする世界のMRA運動の御指導を頂き、一体となって活動させて頂けることに大きな歓びをおぼえ、感謝を致して居ります。

コーMRA世界大会(スイス)

(1984. 7月7日～9月2日)

テーマ

「地球の様相を一新するための一人一人の役割」

(Everyone's part in Renewing the face of the Earth)

7／7～15 **"ヨーロッパ"**

7／27～8／3 **"家庭の再発見と再建のために"**

8／6～13 **"南北アメリカとヨーロッパ"**

8／17～23 **"アフリカ"**

8／24～29 **"人と経済"**
創造性――危機を乗り越えるために
(産業界や労働組合の人々、及び政治家、経済的問題に関心のある人々のためのセッション)

8／30～9／2 **"政治会議"**
地球の様相を一新するには

眼下にレマン湖を望む景勝の地、スイスのコーで開かれるこのMRA世界大会には、日本からも毎年50名くらいの方々が参加されております。お申し込みは事務局まで。

あの時、この人

私が体験した3年間の海外生活 そのV

市原　登志子

◆イギリスで、ノルウェーで、「インドへ行きます。」そう言って出発した私の海外生活も、三年目となりました。イギリスの大学の街オックスフォードでは、英語学校のコースで勉強しておりました。この街は、MRAの前身であるオックスフォードグループが、その創始者フランクブックマン博士を中心として、スタートした所でした。そのように、多くの思想がこの街で生まれ、多くの有名無名の偉人たちをこの街は生み出してきました。世界に対して大きな役割を果たしてきたここオックスフォードで、私も様ざまな試練を通して、精神的にひとり立ちすることを教えられました。それは、自分のおかれた環境に正しく対処し、難しい状態にいる時には、それを乗り切ることのできる力、とでもいうものでしょうか。

また私は、自分の住んでいるイギリスが好きになりはじめました。それは、オックスフォードでホームステイをさせていただいたイギリス人一家を、自分の本当の家族として受け入れることができるようになったためでした。そんな中で、私の英語のコースも終わり、その最終目標としていた外国人のための公認英語検定試験も合格することができ、ひとまずオックスフォード生活にピリオドを打つことになりました。六ヵ月間慣れ親しみ多くを教えられた所を、そして、すっかり私のもう一つの家族となってくださっていたベイナード・スミス一家と離れることには、ひとしおの思いがありました。

●シェークスピアを生んだストラトフォード

その後私は取りあえず、イギリスの私の拠点地でもある、ロンドンの中心に位置するMRAハウスに戻ることになりました。ロンドンへ向かうバスの中から見た田園風景には、とても美しいものがありました。イギリスでは毎年、全国で最も美しく保存されている街や村に対して、賞が与えられるそうです。古き良きものをあくまでも尊重し、たいせつに残していこうとする、イギリス人の国民性がうかがえるような気がいたしました。近代化に伴って、大手スーパーなどの進出もやはり大きな問題となっているようでしたが、バスにゆられながら通過してゆく古い街並や村々を見る時に、まだそこに息づく素朴さを、たいへんうれしく感じました。

イギリス滞在二年の間に、二週間ほど憧れのノルウェーを訪ねることができたことにも感謝しています。柳沢練造先生御夫妻のお供をさせていただいたのですが、ノルウェーは自然に恵まれた美しい国でした。自然を愛し、たいせつにする国民性があるのでしょう。「日本は家々の間に木々が植わっているが、ここでは自然の中に家が建てられている。」との柳沢先生のおことばに象徴されるように、自然が失われることなく、住居と自然の調和の美しさがそこにはありました。

◆三年間をふりかえって

他の国を見せて頂いたことは、自分の国の再発見をするいい機会でした。それは又、自分自身の発見ともなりました。一番知っているようで案外わかっていないのが「自分」なのかもしれません。海外で生活をすることで、角度を変えて自分を見ることができました。新しい「私」という人間探究の場が与えられたのです。そうすることによって、いろんな面で妥協してきた自分、これで正しいと思っていた自分が、実は、どれだけ変わらなければならないかということを教えられました。昔、人々は地球が宇宙の中心であると信じていました。しかし、地球は、太陽を回る惑星の一つにしかすぎないことが明らかにされました。これも神の摂理なのでしょう。このように私自身も、自分中心から神中心に生きるべきであると示されました。つまり、日々、朝一番に静かになって自分自身を吟味し、全能なる方の声に耳を傾けること、そしてそれを実行することであると示されたのです。

◆日本へ

「今度は、日本に帰って、自分の目で内側からその国を見るべきである。」朝の静かな時にこんなガイダンスが示されました。将来に対する迷いも消え、帰国の準備となりました。ちょうどこの時、ロンドンで●年以上もの間MRA運動の大切な役割を担ってきたMRAハウス、フォーティフォー・チャールズストリートが売りに出されることになりました。私自身のすまいともなっていたため、私が去るのに都合がよくなり、又日本にいる父からも家に戻ることを勧められて帰国となりました。そこで、帰国に必要な資金作りをしなければならなくなりました。インド人の友人と合同で、インド＝日本の夕べを催しました。大使館から借りてきた日本紹介の映画を上映、私個人の経験や抱負などのスピーチ、またコーナーを設けて、日本の民芸品や、私の所持品を売りに出したりもしました。たいへん親しくしていただいていた、日本人銀行員の奥さまから、その夕べのためにおすしまで作っていただきました。結局、多くの方々の善意と協力によって、旅費などの資金作りをすることができたのです。帰国することが可能になった時、私が強く感じたことは、「ガイダンスは与えられるものであり、それを信じて実行してゆく時に、必ず道は開かれるのだ」ということでした。

早いもので、帰国して家族との再会に涙してから、すでに二年半の年月が流れました。

それ以来、父の経営する会社に勤めております。三年間の生活をふり返るその度に思いうかべるのは――さびしい時にそばにいてくれた友、悲しい時に共に泣いてくれた友、うれしい時に共に手をとって喜んでくれた友、まよっている時に親身になって考えてくれた友――その時、その時、私の陰になり日なたになって支えて下さった方々のことです。また毎日、祈るような思いで心配し、ただじっと見守ってくれた家族、とりわけ両親のことです。そういった方々の愛と忍耐、犠牲と祈りがなくしては考えられません。ただ、そのままのつまらない私を受け入れて下さり、忍耐をもって教え導き、愛をもってさとして下さったからこそ可能であったのだとたいへんありがたく思っております。(完)

●日本帰国の資金集めのためのバザー

オーストラリアより

'84 スタディーコース報告

―― 大木 浩史 ――

●メルボルンのMRAセンター「アーマ」

モラル（道徳）という言葉が、一見時代遅れのように考えられがちな今日、いったい私と同年代の若者は、どう考えているのか――そんな疑問を持ちつつ、オーストラリアに来た最大目的であった「スタディコース」に参加しました。

今年で十回目を数えるこのコースは、台湾・香港・フィジー・ニュージーランドなど太平洋諸国をはじめとした、世界八ヶ国の十七名を迎えた国際色豊かなものでした。コースは、メルボルンにある「アーマ」と呼ばれるMRAセンターで、約四週間にわたって行なわれる講義を中心とした基礎コースと、キャンベラやシドニーでのフィールドワーク（社会学習）の二つの部分にわかれます。

基礎コースでは、東西、南北、中近東などの世界的な問題、また、四つの絶対標準・ガイダンス（天に聴くことによって得られる、今、何をなすべきかという啓示）などの、MRAのアイデアについても学びました。このコースには、日本から私の他に、徳永誠さん（アジア友の会で活躍、現在西オーストラリアの大学に留学中）、秋山伸二さん（メルボルンのモナシィ大学で、アジアと西洋の歴史を勉強中）の二人が参加しました。

社会実習では、十一名の国会議員、八ヶ国の大使、大使館関係者の方々におめにかかったり、航空会社カンタスや炭坑の訪問もしました。実際にあらゆる分野で活躍なさっている方々に接しては、いろいろな経験談を聞くことができ、人生のあり方、ガイダンスに基づく生活の大切さなどを学びました。

このコースの期間中、印象に残っているものの中に、次の二点があります。第一に、現在オーストラリアで非常に大きな話題になっている、アジアからの移民の増加とマルチカルチャリズム（複合文化主義）について。移民により国家を形成したオーストラリアでは、第二次世界大戦後次第にアジアからの移民が増え、特にベトナム戦争以後インドシナの難民を中心に急激にその数を増し、現在では年間の移民の四十パーセント、オーストラリア総人口の二パーセントをなしています。（ちなみにオーストラリアの原住民アボリジニーは、一パーセント）十八才から二十七才までの四人に一人が失業中というように、この国の失業率は高く、アジア系とヨーロッパ系のオーストラリア人の間に数々の摩擦と問題とが起きているそうです。

日本においても同様の問題はあります。在日韓国人の問題や、復帰十二年たった沖縄内での問題がそうです。同じ国に住んでいながら、人種や文化の違い、あるいは歴史的な要因から、「共に働く」という人間の生活上とても大切なことを忘れてしまうのです。

第二に、日本と中国との関係についても考えました。コースの期間中に行動を共にした、僕と同年代の中国の青年たちから聞いた、日本に対する憎しみの言葉は、とても大きなショックでした。一九九七年に、香港が新しい局面を迎えるにあたって、中国・香港の将来のために日本が果たせる役割は大きいはずです。しかし、そのためにはまず過去のあやまちを清算し、中国の人々の心の傷をいやす必要があることを感じさせられました。

年令や国をはじめ多くの違いはあっても、共に人生の本質について考え、今年の小田原の会議のテーマである「対立から融和へ」を、求めていかなければなりません。

永野宣言に思う

一二宮秀夫

故永野重雄会頭は、昭和五九年五月四日に永眠されました。

半年余にわたり病床にありましたが、その間、世界の平和・日本の将来・商工会議所の使命などについての考えを所感にまとめられ、四月十一日、会頭の辞任表明と併せて発表された次第です。

同日、故会頭は辞任のあいさつに訪れた際、中曽根康弘内閣総理大臣から「永野宣言」を書くよう請われて署名、また同日辞意表明の記者会見の後、五島会頭臨時代行(当時)から記念品にと求められて、「永野重雄」と署名いたしました。

その中に「故吉田首相の紹介で、シューマンプランの創案者であるロバート・シューマン博士を訪ね、博士からEC共同体の理念を聞いて胸ときめかせた想いがある。」とありますが、吉田首相も永野さん自身とともに、熱心なMRA支持者であったことを思い、敢えてその一部をここに紹介したいと考えました。

永野宣言

永野重雄

一、世界の平和と日本の果たすべき役割

(1)世界の平和を求めて

戦後四十年になろうとしている。わが日本は、戦火による廃墟の中から立ち上がって以来今日まで、日米関係を基軸として発展を続け、いまや自由世界のGNPの一割を占め、第2位の経済力を持つに至った。それは平和の中で培われたものである。このように国家存立の基盤を世界の平和の上に置いている無資源国日本はそれ故にこそ平和を求め続け、また、平和のために貢献しなければならない。

今日の世界は、南北間に横たわる貧富の差、あるいは東西間の体制や主義主張の違いからくる緊張、さらには至るところで見られる戦争や小ぜり合いなど、経済、[illegible]、軍事の面で誠に厳しい情勢にある。

世界の歴史は、貧困が国家間の争いにつながり、さらに戦争へと発展することを教えている。南北間を包み込んだ世界的規模で経済の一体化が進んでいる現在、われわれは力を合わせて発展途上国の貧しさからの解放に手を貸すべきである。

東西間に目を転ずるとき、人類の生存に係わる大きな課題がある。即ち、科学技術の止まるところを知らない進歩により、人類は地球を一瞬のうちに火の玉と化し得る恐るべき兵器を持つに至った。東西両陣営がもし戦火を交えるならば、人類の破滅は火を見れよりも明らかである。破滅の道に突き進むか、それとも平和共存の下に幸福の道を歩むか、これこそ神が人間に与えた試練であろう。前途にいかなる困難があろうとも人類の英知によってこれを乗り越え、後者の道を選ばなければならない。平和維持に最も大きな係わりを持つのは、米ソ二大大国である。わが国は、経済力、外交力をフルに発揮し、またその地理的位置や原爆被爆国としての経験にかんがみ、両国の良好なる関係樹立に努力を払っていかなければならない。

(2)人類共通の願い「世界は一つ」

人類は肌の色の違いや顔かたちの違いはあるが、同じ宇宙船〝地球号〟に乗り合せており、平和共存の道を歩まなければならない。

一九五三年の夏、私は国際商業会議所、ILOの両会議に出席のため、ヨーロッパを訪れた。その折り、故吉田首相の紹介で、シューマンプランの創始者であるロバート・シューマン博士を訪ね、博士からEC共同体の理念を聞いて胸ときめかせた想いがある。その時以来、博士の人為的な国境を越えて「欧州は一つ」という理念と、国情の違うアジアでもこの理念が通用するとの意見は、私の脳裡に焼きついて離れなかった。一九六七年設立を決定した太平洋経済委員会構想はこの理念に基づくものである。現在、本委員会が当初の目標に向かって着実に前進しつつあることは喜ばしい。

いずれの国の人々も貧困を追放して豊かさを、病魔を追い払って健康を、そして戦争の相克を打ち負かして調和ある平和を希求している。人類に共通するこの心がある限り、いずれの日にか「世界は一つ」になる[illegible]している。

二、世界各国との緊密な関係の樹立

(1)関係の緊密化こそ日本の生きる道

わが国経済は、世界のあらゆる国々から資源を買い、国民の知恵と技術と労働を付加してこれを輸出し、また資源や国民生活に必要な製品を買うというサイクルの中で成り立っている。このことを考えるならば、日本のこれからの発展は、世界の国々との緊密な関係なしにはありえない。

私は、この信念の下に、一九六二年、まだ対日感情の必ずしもよくなかった豪州との間に日豪経済合同委員会を設置し、資源国豪州との関係を切り開いた。その後、アセアン、中南米などの世界各国との間にこうした委員会を設けている。また、数多くの経済親善使節団を組織し、あるいは海外から受け入れるなど、世界各国の要路の人々と膝突き合わせて関係の緊密化に努めているところである。

(2)食糧問題などに寄与

人の生命は短い。私の生命もまた残り少ない。しかし、神が私になお幾ばくかの時間を与えてくれるならば、是非実現させたい二つの夢を持っている。ここで少しその夢にふれてみたい。

一つは、食糧問題に対する貢献である。いま、40数億を数える世界の人口は21世紀初めに60数億に達するものと推計されている。このまま推移すれば、人類は深刻な食糧危機に直面し、悲惨な結果を迎えるのである。一九七九年にローマで開催された国連食糧機構もこのことを指摘している。21世紀に入ってからでは遅い。世界の平和と人類の幸福のために、日本の優れた技術と持てる人類愛を発揮し、この問題の解決に乗り出すべきだと思う。こうした考えから、私はヒマラヤ山系に水源を発するインダス川の水を利用してタール砂漠を肥沃な農地に変える夢を抱いている。既に印・パ両国首脳の耳にも入れたところである。同様に、ナイル川の水を利用してヌビア砂漠を農地にする夢を持っている。

三、平和日本のさらなる飛躍を目指して

(1)世界に貢献するための経済力の涵養

日本が世界に貢献できる道は経済、外交等いろいろな側面がある。しかしとりわけ重要なのは経済である。今後とも科学技術の進歩発展の下に経済の力強い歩みを続けていかなければならない。そして、ここから生ずる余力を持って発展途上国など世界の貧しい国々へ暖かい手を差し延べていく必要がある。

(2)時代に合った新しい在り方を探る

ところで、経済に活力を持たせるためには、経済社会の効率化を図ることが肝要である。このためには、行財政改革を大いに進めなければならないし、また、民間のバイタリティも活用しなければならない。

(3)次代をになう青少年教育

次代の日本を背負うのは若き青少年である。国家の運命は正に彼等の双肩にかかっている。ところが昨今、子が親に、生徒が先生に乱暴を働く例が後を断たない。誠に憂慮すべきことであり、慨嘆に堪えないところである。親子には自然の愛情があり、師弟の間には自ずから礼節があるはずである。あれほど信義礼節の正しかった日本民族が、いま、衣食住足りて礼節を忘れてしまったのは何故であろう。それは物の豊かさばかりを追求して、心の教育をおろそかにしているからである。いまの教育に欠けているのは、この点である。人に対する思いやりの心、愛情心、人間性といった心の教育こそ、記憶力重視の教育、技術技能偏重の教育などに優先する根元的な教育だと思う。心の教育、それは戦争を無くして人類最大の願いである平和につながる教育である。

中曽根内閣の下で、いわゆる教育臨調が設置され、教育の在り方全般について検討が開始されようとしているが、私は、そうした場合も、この問題が重点的に取り上げられることを期待するものである。

●ローベル・シューマンの言葉

「MRAが何か新しい厚生施設とか、または既成の学説と同系統の新しい理論であるなら、私は懐疑的であるだろう。しかしMRAがもたらすものは、実践にうつされた人生哲学である。」

「政策の変化を問題にするのではなく、人間の変化(チェンジ)が問題である。デモクラシーとその自由とは、デモクラシーの名において行動する人びとの生活の質によって決定される。」

「真のデモクラシーをめざすMRAに、私は心から敬意を表する。MRAこそ、悩める人類の心に精神的価値の尊さを再び打ち立てるものである。」

ガイダンス・3

「でも」、「だけど」と何十回、何百回、私たちはこの言葉を繰り返すことでしょう。「そんなこと言ったって…」と言い訳は数限りなく浮かんできます。

MRA創始者ブックマン博士も同じでした。「何と言ったって相手が間違っているのだ。」――憤慨して辞職した彼は、過労と心労で健康を害してもいました。医者から保養のための旅行をすすめられて旅に出たものの、心は千々(ちぢ)に乱れ、美しい景色を見ても一向に心は晴れなかったのでした。

英国の田舎のとある小さな教会堂にはいったブックマンは、そこで一つの体験を得ました。心に宿していた悪感情・憎む心が、自分を神から引き離しているのだということを直感したのです。「相手は確かに間違っている。だが、悪感情を抱いた自分もやはり間違っていた。」こう悟った彼は、憎んでいた六人の人達に謝りの手紙を書きました。クリスチャンの牧師として生きようとしていた彼は、この時、神と自分を切り離していた深い溝が埋まったように感じ、新しい力が湧いてきたと語っています。人間が変われる、という体験でした。

素直に自分の過ちを認めること、言い訳のつっかい棒を外すことが、心を自由にする秘訣であることを、彼は会得したのです。そればかりでなく、このような体験は誰でもその気になれば、いつでもどこでも得られることも知ったのでした。それは一九〇八年の出来ごとです。

それから五十余年、彼の足跡は広く世界各地に及びました。そして、宗教・人種・年令・階層・性別というあらゆる違いを越えて、人の心に呼びかける「まこと」があることを、立証したと言えましょう。

これは、理論によって実証できることではなく、試してみる以外に道がないこともMRAの特徴です。

家庭教育講座第一回開講のご案内

（日　時）11月7日、14日、21日、28日の4回、それぞれ午後6:30～9:00
（場　所）国際ＭＲＡ日本協会会議室
（定　員）20名（定員になり次第〆切らせていただきます）
（受講料）20,000円
（講　師）山崎房一（当協会理事、新家庭教育協会理事長「お母さんこうすればわが子はみるみる変わる」の著者）

（講座内容）
第一講　子供の能力開発法、他
第二講　効果的コミュニケーションのコツ、他
第三講　記憶力・理解力・創造力は安心感から、他
第四講　意見の対立の効果的処理法、他

ＮＨＫや新聞各紙で好評の父親講座と母親講座を合わせて開講することになりました。お子さまのことで悩み、迷い、心配している方々に、教育に対する自信を与え、子供の心に安心感とやすらぎを与えます。独身の方も大歓迎です。受講ご希望の方は早目に事務局へお申し込み下さい。

心に残る言葉

「あかつきへの誓い」

カリダサ（5,000年前に、インドで書かれたもの）

今日というこの日に注目せよ。
なぜなら、今日こそ人生そのものである。
その短い１日というコースの中に、
私達が今生きているという
いっさいの真理と現実がある。
成長の感激も、
我々のこの活動の栄光も、
いっさいの美の輝きもこの１日の中にある。
過ぎ去ったきのうは夢にすぎない。
いまだ来たらざる明日は、まぼろしに過ぎない。
しかし今日１日を
本当に充実感をもって過ごしたならば、
きのうは過ぎ去った夢ではあっても
幸福な夢となり、
そして明日はいまだ来たらざる夢ではあっても、
希望にみちたまぼろしとなるのである。
であるがゆえに、
今日というこの日に注目せよ。
これがあかつきへの誓いの言葉である。

（兼松正氏の訳による――同氏が小田原会議中に朗読されたものを掲載させていただきました。）

●事務局近況●

●小田原会議やその後に続いたキャンペーンの準備に、運営に、また接待にと、多くのみなさまにご協力いただき、ありがとうございました。家庭を開放して海外のお客様を受け入れて下さった方々にも、感謝申し上げます。

●二年半もの間、英国のＭＲＡから応援に来て下さっていたクレイグ一家三人が、このたび一時帰国されます。来年の三月には、一家四人で再び来日される予定です。一生懸命日本語を学び、日本のチームの一員として異なる文化・生活の中で多くの友人を作って、日本と世界の相互理解のために尽くしてくださいました。御苦労様でした！

●去る六月二十四日、東京の日本青年館にて、多くの方々の祝福を受けて、事務局の長野清志さんと、矢後喜久江さんの結婚式がとりおこなわれました。お二人のお幸せとご活躍とを心よりお祈り申し上げます。

●秋にインドでＭＲＡの研修を受けたいと意欲を燃やす、日立市の杉裕雄さん（二十才）がこの四月から、夜間の英会話学校に通いながら、昼間事務を手伝ってくれています。どんなにコキつかわれても、嫌な顔ひとつしない好青年と評判です――がんばって！

●ではみなさま、どうかお元気で！

～おわび～

前号の「心に残る言葉」では、『無財の七施』をご紹介いたしましたが、関裕光氏より、数ヶ所の誤りがあるとの御指摘がございました。ここに訂正させていただくとともに、深くお詫びを申し上げます。

『無財の七施』

一、現施……やさしいまなざし
一、和顔悦色施……笑顔
一、言辞施……やさしく親切な言葉
一、身施……敬いの態度
一、心施……思いやりの心
一、床座施……場所や席をゆずる心
一、房舎施……心からのもてなし

（大正大蔵経第四巻の中の「雑宝蔵経」より）